

協同的探究学習の手法を用いたやりくり授業 相手意識を持った主活動のたとえば

竹川由紀子

鳥取大学附属中学校 英語科

E-mail: takekawa_yk@tottori-u.co.jp

TAKEKAWA Yukiko (Tottori University Junior High School) : Using collaborative learning in group work: Examples of activities which encourage collaboration between students.

要旨 — 1年生は既習の語いや表現は少ないが、「英語を使いたい、英語で表現したい」という意欲は十分にある。英語の知識だけでなく、興味関心のある分野に関する知識やさまざまな経験を関連付けて取り組むことができるような主活動を設定し、「やりくり授業」として実践する。個人探究と協同探究を通して、生徒個人の思考を発信し、ペアや全体で表現を共有することで考えが広がり既知の知識と結び付けて表現することができるかを検討する。

キーワード — 個人探究, 協同探究 (ペアワーク, グループワーク), 主活動, インプット活動, アウトプット活動

Abstract — First grade students' English skills are limited. They have not yet learned much vocabulary or English expressions but they are highly motivated and have a strong desire to use English. I tried to plan activities that piqued their interest and enabled them to learn English and at the same time as gaining knowledge about other subjects. In this paper, I will discuss the effect of the activities with regard to how well the students were able to communicate and express their thoughts through individual and group activities, as well as how well they could connect their new knowledge to existing knowledge.

Key words — individual work, pair work / group work, main activity, input activity, output activity

1. はじめに

中学校学習指導要領では、「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成」を目指し3つの柱に沿った目標が提示されている。そのうち、(学びに向かう力・人間性等)に関する項目の目標が次のように示されている。

外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

本校1年生は、英語で表現することや英語を使って他者と関わることに意欲的である。特に「話すこと」の活動では、質問に対して自分の知っている語いをやりくりして答えようとする。一方、「書くこと」の活動では、個人差が見られる。アルファベットのなぞり書き程度の習得はあるが、目的のあるまとまった英文を書くことは未習、未経験の生徒が多かった。

この実践では、話したり書いたりする活動場面を具体的に示し、主体的に取り組ませた。また、目的意識を持たせるために、誰に対する発信であるかを示し、相手意識を持ってコミュニケーション活動に取り組ませるようにした。1年生の段階では、英語に関する知識だけでは表現を広げることが難しく、学習意欲の高まりに乏しい。そこで、英語の知識と既知の知識(興味関心のある語いなど)を結びつけて考えられるような課題を設定しやりくり授業とした。個人探究や協同探究で思考を広げ、最終的に個人で問題解決に向かっているような学習展開とした。

1.1 やりくり授業について

やりくり授業では、生徒が自分の既知の知識と語いで英文づくりに臨み、他者との共有を通して思考を広げていく。授業の実践にあたり、非定型の課題を授業の主活動におき、個々の生徒が持つ

ている既存の知識を土台として、個別探究、協同探究それぞれのアプローチを経て、課題解決に向かっているような協同探究学習の手法を用いて行った。実践した授業は下記のような特徴を持つ。

- (ア) 主活動が非定型問題であること。
- (イ) 生徒が自身の経験や既存の知識を使って問題解決に取り組んでいること。
- (ウ) 他者との関わりを通して自分の思考や考えを広げる時間があること。

授業の流れは協同探究学習(図1)に基づき、「個人探究(導入問題)」から「協同探究(情報の共有・思考の広がり)」を経て、最終的に「個人探究(展開問題)」ができるようにした。「協同探究」の場面で他者の知識と自身の知識や経験とを関連づけることで生徒の思考の広がりが生まれる。一度、個人で思考したことを、他者との共同探究を通して深化させていくことで思考がより深まりを増す。それらのヒントを得ながら、再度個人で考え、自己表現として発信するまでの過程を扱うこととした。

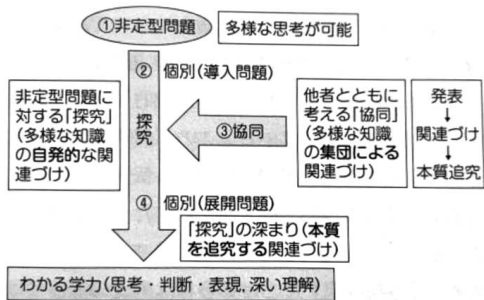


図2-1 「協同探究学習」 — 学習方法としての4つの特質

図1 協同探究学習(藤村ほか2018より)

1.2 めざしたい生徒の姿

やりくり授業において、どんな生徒の姿をめざすのか? 単元やその時間の本時目標はさまざまでも、学習を通して生徒につけたい力の根幹や主活動に取り組む生徒の姿は明確にしておく必要がある。生徒の学びは、授業における生徒の姿から見とれるものがあつたり、記述したワークシートから読み取れるものがあつたりと様々である。生徒が学びを深め、その学びを次へ繋げていけるように、

段階的な指示や支援を行い、めざしたい生徒の姿へと近づけていきたい。授業を通してめざしたい生徒の姿「学びに向かう力」を次のように考えた。

- (ア) 意欲・心理面…英語を使うことを楽しみ、間違いを恐れずに表現する。さまざまな言語や文化に興味を持ち、自ら知ろうとする意欲を持つ。
- (イ) 協同探究面…ペアやグループでの活動のよさを理解し、ペアでの言語活動や協同学習に積極的に取り組む。他者とともに多様な知識を関連づけて新たな気づきを発見する。
- (ウ) 発信力(英語の運用能力)…既存の知識や語いと伝えたい内容を結びつけて自分でやりくりしながら、相手へのメッセージを発信する。

1.3 実践内容(今年度本校研究大会7月)

1.3.1 授業の展開

7月に実施した授業では、国立鳥取大学附属中学校1年生に「英国生徒へ自己紹介の英文を書く」という主活動でやりくり授業を行った。

学習活動	
1. あいさつ	
2. アウトプット活動①	一般動詞の確認・音読 一日の生活の音読 相手とのやりとり
3. 発表とシェアリング①	英国生徒の自己紹介文を紹介し共有する
4. やり通りの相手を理解する	イギリスの生徒の情報を読む (個人→班) 写真・名前・年齢・兄弟、姉妹 好きなことなどの情報を読む
5. アウトプット活動②	相手を意識した自己紹介文を書こう ・相手を意識した質問文を加えた自己紹介英文を書く(班→個人) 目標は6文
6. 発表とシェアリング②	相手への質問文を加えた自己紹介文を紹介し全体で共有する。
7. 振り返り	本時の振り返りをする

1.3.3 協同探究

前述の個人探究で生徒が記述した英文で、(ア) (イ) でとどまる思考を (ウ) (エ) のような思考に広げるために学習過程では個人探究に加えて、協同探究の場面を設定した。

個人探究で考えた紹介文をペアで読みあい、そのうち何名かがホワイトボードに記述し(図3)全体で共有する材料とした。

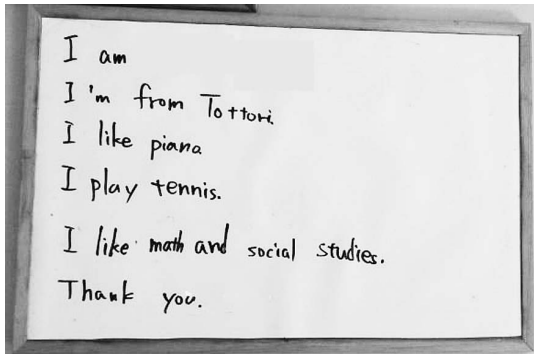


図3 協同探究「発表とシェアリング」
個人探究のみで生徒が書いた自己紹介文

自分の英文を他者の英文と比較して読み比べることで、自分自身にない発想や既習の接続詞や代名詞の使い方などに気づく。表現豊かな英文は全体で共有した。(図4) 他者の英文から気づきを得られ、自分の知識を加えて工夫した英文を書こうとする意欲が見えた。自分の英文でも使ってみようとする意欲が生まれてくる。また、自分の英文が紹介されることで、生徒の自己肯定感も生まれる。自己表現を通して、思考を広げていくことはもちろんであるが、同時に生徒の自己肯定感を育成し、他者理解をすることも協同探究を通して得られる力の一つである。



図4 「発表とシェアリング」
自己紹介文を全体で共有する

1.3.4 現物の資料の活用

コミュニケーションの相手を意識して活動に取り組むことができるように、「手紙を書く」活動の対象者(相手)を伝える。具体的には、「英国生徒へ自己紹介を書く」ことを伝える。英国生徒とは今年度の10月に来校する英国生徒であり、本校の生徒たちも心待ちにしている交流である。今後の交流に備えて事前に自己紹介をするという必然性が生まれると同時に交流に向けた大切な一歩ととらえやすく、現実感を持って活動に取り組ませることができた。

最後に、来日予定の英国生徒のうち、2名の生徒のインフォメーションカード(図5)を示し、その情報を読み取らせる時間を取った。

図5 英国生徒のインフォメーション

カードには写真や生年月日、年齢や趣味などが書かれており生徒たちは肩を寄せ合って情報を読み、興味津々でその内容を読み込んでいく。(図6) 文字やイラストなどの情報から英国生徒を想像し、カードに書かれた情報と自分が書いた自己紹介文を見比べながら、紹介文の結末にふさわしい質問として、相手にどんなことを尋ねたらよいのかを再度思考する。相手への質問を考えることが生徒のやりくりとなる。



図6 カードを班で読む生徒たち
本物の写真や文字が気持ちを高揚させる

現物の資料は、学習の動機づけとして絶好の材料である。英国生徒の写真や直筆の文字から相手のイメージがふくらみ、何を伝え、質問するかといったそれぞれの思考が活性化される。

この後、さらに協同探究(班)で、手紙を送る相手への質問を考える。(図7)さまざまな質問の仕方があることに気づいた生徒は、再度自分で思考し、相手への質問文を考えていく。

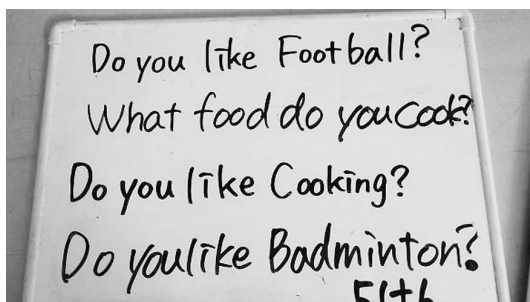


図7 班で考えた相手への質問文

新たに表現や相手への質問を加えた自己紹介文を以下に示した。(下線部は生徒が協同探究で新たに加えた英文)

協同探究を経て生徒が書いた英文 (例)

(ア) の生徒の質問文

I am ○○.
I like read books.
I like comics.
I like "BORUTO" very much.
BORUTO is Naruto's son. (追加表現)
What comics do you like? (質問)

(イ) の生徒の質問文

I am ○○.
I like chicken and China food.
I play baseball and table tennis.
I watch dorama very much.
It's interesting.
What studio Ghibli movies do you watch?

(エ) の生徒の質問文

I am ○○.
I like music.
I play the piano every day.
I want to go to Scotland.
Beceose I want to see the bagpipes.
What's dance music do you like?

(ア)では、一般動詞 like のみで英文を書いていた生徒が他者の英文を参考にして、つながりのある英文を加えて書くことができた。(イ)では、一

般動詞を多様に使うことができていた生徒が、つながりのある英文を書き、「ジブリ映画が好き」という情報からそれに関連した質問を加えて書いている。

(エ)では、多様な表現で自分を紹介していた生徒が、相手の趣味である dance に関連した質問を考えて書いている。多くの生徒は、(ア)のように自分が紹介した英文の内容に関連した質問文を書くことができた。中には、(イ)(エ)のように相手の情報をしっかり読んで、相手に関連した質問を書いている生徒も見られた。個人探究中の机間指導では支援を必要とする生徒への声かけも必要だが、個々の生徒の記述に目を配り、発想のすばらしさや着眼点の良さを見落とさないようにしたい。生徒の英文を全体へ示し、共有することで今後の表現活動への意欲につながる。(図8)同時に、生徒の英文の良さを認め、全体へ示すことはその生徒の自己肯定感を高め、全体に対してはめざしたい活動のゴールを示すことのできる有効なフィードバックとなる。



図8 「発表とシェアリング」

英文を全体へ示し、表現の工夫を共有化
同時にめざしたいモデルを提示する

1.4 やりくり授業の考察

主活動を設定するにあたってはその活動の中に、

- 自身が発信したい・伝いたいメッセージがあること
- 誰に対してのメッセージか、伝える相手を意識して取り組むこと

が重要であると考えている。それは、言語の使用目的とそれらの使用場面とを生徒自身が理解し、既存の経験や知識、そして習得した語いや表現を組み合わせて自己発信するために不可欠だからである。

7月に行ったやりくり授業では「英国生徒へ自己紹介文を書く」という非定型問題を提示し、さらに「英国の生徒へ伝える」という相手意識を持って主活動に取り組ませた。

学習形態	学習活動
① 個人探究	自己紹介の英文を書く。
↓	
② 協同探究 ペア・全体	ペアで英文を読む。 自己紹介にふさわしい表現の方法を確認する。
③ 協同探究 班・全体	コミュニケーションの相手の情報を読む。 相手を意識した質問を考える。
↓	
④ 個人探究	相手への質問文を含んだ自己紹介の英文を書く。

協同的探究学習の手法を用いて授業を行った結果、生徒の思考の中で

- ① 自分の知っている表現でやりくり
- ② 次に、他者の英文を聞いて使用すべき動詞や、つなぎ言葉など表現を使ってどのように書いていくかのやりくり
- ③ さらには、相手の写真や情報を読み取って、伝える相手を意識した英文にするためのやりくりが生まれ、
- ④ 再び自分で思考して英文を書いた。

これまでの経験や既存の知識を元に、表現可能な英語の表現とそれらを繋げながら英文づくりをしていく思考の過程がまさに生徒のやりくりであり、生徒が書いた英文から、それぞれが込めたいメッセージや相手の何に着目しているかを読み取れる。(図9)

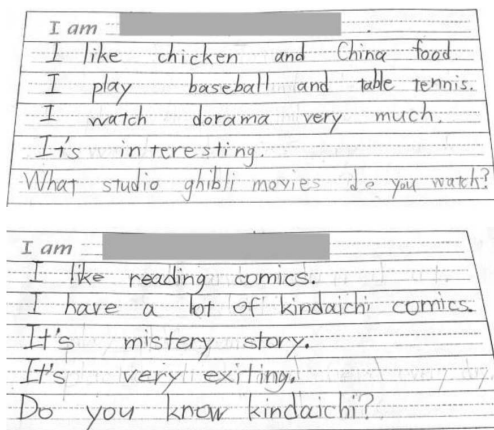


図9 相手への質問を含んだ自己紹介文

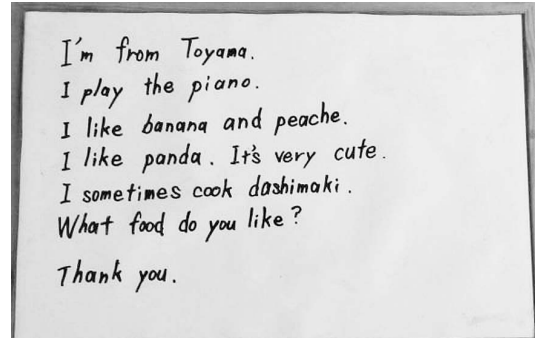


図10 学習活動3「質問を加えた自己紹介文」

上記(図10)は、協同探究を経て生徒が記述した英文である。さまざまな動詞が使えていることに加えて、代名詞を使った表現が増えていること、自分の好きなものを伝えたあと、それに関連した質問をしていることなどが生徒の考えた工夫であることがわかる。

「自己紹介文を書く」活動で見られた生徒のやりくりは、英語に関する既習の知識だけでなく、個々の趣味趣向や興味に関すること、価値観や経験によるところも大きく表出している。英文には一人ひとりの思いが乗り、温かみのあるものになった。

また、他者との関わり(ペアや全体での共有)を通して思考が広がり、現物の資料(本時では英国生徒のカード)を用いることで相手意識を持って意欲的に取り組もうとする学習への動機づけができた。(図11 図12)



図11 カードを班で読む生徒たち
分からない語は協力しながら読む

やりくり授業では、本時の問いと既存の知識や経験とを結び付けて考える時間を十分にとり、個人の発想を全体へ広げていった。自分の英文が紹介されることで、生徒の自己肯定感が高まり、意欲的に活動しようとする心情も育むことができたように思

う。英文を共有する場面では、他者のさまざまな考え方を受容し、認めることを通して互いに学ぶことのできる学級を支える重要な要素となった。



図 12 英国生徒の手紙を読む生徒たち
目を輝かせながら英国生徒の文字を読む

1.5 まとめ

やりくり授業では、多様な考えを引き出すことのできる非定型の問題を主活動におき、そこに相手意識を持たせて活動に取り組みさせた。現物の資料を示すことで、活動への意欲がさらに高まり、意欲的に取り組める生徒も増えた。

学習展開では個人探究→協同探究(ペア)(全体)→個人探究の流れで個人の思考をペアや全体で共有し個々が持つ表現を広げたり共有したり

することを通して、さらに思考の深まりが生まれ多様な表現が生まれた。

やりくり授業を進める中で、教師自身がめざしたい生徒の姿を明確に持ちながら、授業の展開を考えることができた。これまでに身に付けた知識や経験、各教科や領域で身に付けた知識を統合しながら発信や受信をしていける生徒たちの今後が楽しみである。やりくり授業はそんな生徒の自己発信力を支えていると信じ、今後も深化探究していきたい。

【参考文献】

- 足立和美 (2016) 『地域教育学研究 8 巻 1 号』 鳥取大学地域教育学科
 足立和美 (2014) 『地域教育学研究 6 巻 1 号』 鳥取大学地域教育学科
 澤井陽介 (2017) 『授業の見方』 東洋館出版社
 藤村宣之ほか編 (2018) 『協同的探究学習で育む「わかる学力」』 ミネルヴァ書房, 40pp-41pp, 211pp-215pp
 山本崇雄 (2019) 「教えない授業」の始め方 アルク
 向後秀明 (2019) 新学習指導要領が実践できる! 中学校英語授業パーフェクトガイド 学陽書房
 本研究は、公益財団法人博報堂教育財団の研究助成を受け、実践、分析を行ったものである。